

2018年12月11日「経済数学」小テスト解答

I I を \mathbf{R} の開区間とします。 $f : I \rightarrow \mathbf{R}$ が凸関数であるとします。このとき $x_1, x_2, x_3 \in I$ が $x_1 < x_2 < x_3$ を満たすとき

$$\frac{f(x_2) - f(x_1)}{x_2 - x_1} \stackrel{(*)}{\leq} \frac{f(x_3) - f(x_1)}{x_3 - x_1} \stackrel{(**)}{\leq} \frac{f(x_3) - f(x_2)}{x_3 - x_2}$$

を証明しましょう。最初の不等式 (*) は、 x_2 を

$$x_2 = (1-t)x_1 + tx_3$$

と $0 < t < 1$ を満たす t を用いて表すとき

$$f(x_2) \leq (1-t)f(x_1) + tf(x_3)$$

が成立することを用います。

解答 $x_2 = (1-t)x_1 + tx_3$, $0 < t < 1$ を満たす $t \in \mathbf{R}$ が存在します。このとき f が凸関数であることから

$$f(x_2) \leq (1-t)f(x_1) + tf(x_3)$$

が成立します。このとき

$$\begin{aligned} \frac{f(x_2) - f(x_1)}{x_2 - x_1} &\leq (1-t)f(x_1) + tf(x_3) - f(x_1)(1-t)x_1 + tx_3 - x_1 \\ &= \frac{t(f(x_3) - f(x_1))}{t(x_3 - x_1)} = \frac{f(x_3) - f(x_1)}{x_3 - x_1} \end{aligned}$$

が成立します。他方

$$\begin{aligned} \frac{f(x_3) - f(x_2)}{x_3 - x_2} &\geq \frac{f(x_3) - (1-t)f(x_1) - tf(x_3)}{x_3 - (1-t)x_1 - tx_3} \\ &= \frac{(1-t)(f(x_3) - f(x_1))}{(1-t)(x_3 - x_1)} = \frac{f(x_3) - f(x_1)}{x_3 - x_1} \end{aligned}$$

も成立します。

II (2) $p > 1$ のとき $f(t) := t^p$ が $I = (0, +\infty)$ 上で狭義の凸関数であることを示しましょう。

(2) $x, y > 0$, $x \neq y$, $0 < \alpha < 1$ のとき、不等式

$$(1-\alpha)x + \alpha y)^p \leq (1-\alpha)x^p + \alpha y^p$$

が成立することを証明しましょう。

解答 (1) $f'(t) = pt^{p-1}$, $f''(t) = p(p-1)t^{p-2} > 0$ が $t > 0$ に対して成立しますから、 $f(t)$ は $I = (0, +\infty)$ 上狭義の凸関数であることが分かります。

(2) (1) から $0 < a < b$ のとき

$$((1-t)a + tb)^p < (1-t)a^p + tb^p \quad (0 < t < 1)$$

が成立します。

$X < y$ のとき $x = a, y = b, \alpha = 1 - t$ として

$$(\alpha x + (1-\alpha)y)^p \leq \alpha x^p + (1-\alpha)y^p$$

が従います。

$X > y$ のとき $x = b, y = a, \alpha = t$ として

$$(\alpha x + (1-\alpha)y)^p \leq \alpha x^p + (1-\alpha)y^p$$

が従います。

III $f : (a, b) \rightarrow \mathbf{R}$ が凸関数とします。

$$U := \{(x, y); a < x < b, y > f(x)\}$$

が凸集合となることを示しましょう。

解答 $(x_0, y_0), (x_1, y_1) \in U$ とします。このとき

$$a < x_0, x_1 < b, f(x_0) < y_0, f(x_1) < y_1$$

が成立します。 $0 < t < 1$ を満たす $t \in \mathbf{R}$ に対して

$$x_t = (1-t)x_0 + tx_1, y_t = (1-t)y_0 + ty_1$$

と定めて $P_t(x_t, y_t) \in U$ ($0 < t < 1$) を示します。

(i) $x_0 = x_1$ のとき $x_t = x_0$ となります。このとき

$$y_0 > f(x_0), y_1 > f(x_1) = f(x_0)$$

が成立することから、 $0 < t < 1$ のとき

$$y_t = (1-t)y_0 + ty_1 > (1-t)f(x_0) + tf(x_0) = f(x_0) = f(x_t)$$

から $P_t \in U$ が成立します。

(ii) $x_0 \neq x_1$ のとき $x_0 < x_1$ としても一般性は失いません。このとき f が凸関数であることから $0 < t < 1$ のとき

$$f(x_t) \leq (1-t)f(x_0) + tf(x_1) < (1-t)y_0 + ty_1 = y_t$$

から $P_t(x_t, y_t) \in U$ が成立します。

IV U_1, U_2 を \mathbf{R}^2 の凸集合とします。 $U_1 \cap U_2$ が凸集合となることを証明しましょう。

解答

$$P \in U_1 \cap U_2 \Leftrightarrow P \in U_1 \text{ AND } P \in U_2$$

に注意しましょう。 $P_0(x_0, y_0), P_1(x_1, y_1) \in U_1 \cap U_2$ とします。 $0 < t < 1$ を満たす $t \in \mathbf{R}$ に対して

$$x_t := (1-t)x_0 + tx_1, \quad y_t := (1-t)y_0 + ty_1$$

として P_t を定めます。 $P_1, P_2 \in U_1$ で U_1 が凸集合であることから

$$P_t \in U_1 \quad (0 < t < 1)$$

が従います。さらに $P_1, P_2 \in U_2$ で U_2 が凸集合であることから

$$P_t \in U_2 \quad (0 < t < 1)$$

が従います。以上から

$$P_t \in U_1 \cap U_2 \quad (0 < t < 1)$$

が分かりますから、 $U_1 \cap U_2$ は凸集合です。

V $\alpha, \beta > 0$ とします。第1象限 \mathbf{R}_{++}^2 上の函数

$$u(x, y) := x^\alpha y^\beta$$

が凹関数である必要十分条件が

$$\alpha + \beta \leq 1$$

であることを示しましょう。

解答

$$f_x = \alpha x^{\alpha-1} y^\beta, \quad f_y = \beta x^\alpha y^{\beta-1}$$

$$f_{xx} = \alpha(\alpha-1)x^{\alpha-2}y^\beta, \quad f_{xy} = f_{yx} = \alpha\beta x^{\alpha-1}y^{\beta-1}, \quad f_{yy} = \beta(\beta-1)x^\alpha y^{\beta-2}$$

となります。これを用いて f の Hesse 行列式を求める

$$\begin{aligned} \det(H(f)(x, y)) &= \begin{vmatrix} \alpha(\alpha-1)x^{\alpha-2}y^\beta & \alpha\beta x^{\alpha-1}y^{\beta-1} \\ \alpha\beta x^{\alpha-1}y^{\beta-1} & \beta(\beta-1)x^\alpha y^{\beta-2} \end{vmatrix} \\ &= \alpha\beta(\alpha-1)(\beta-1)x^{2(\alpha-1)}y^{2(\beta-1)} - \alpha^2\beta^2 x^{2(\alpha-1)}y^{2(\beta-1)} \\ &= \alpha\beta(1-\alpha-\beta)x^{2(\alpha-1)}y^{2(\beta-1)} \end{aligned}$$

となります。

f が凹関数である必要十分条件は

$$f_{xx}(P), f_{yy}(P) \geq 0, \quad \det(F(f)(P)) \geq 0 \quad (P \in \mathbf{R}_{++}^2)$$

です。

$$f_{xx}(x, y) = \alpha(\alpha-1)x^{\alpha-2}y^\beta \leq 0$$

が任意の $x, y \in \mathbf{R}_+$ に対して成立する条件は $\alpha \leq 1$ です。同様に

$$f_{yy}(x, y) = \beta(\beta-1)x^\alpha y^{\beta-2} \leq 0$$

が任意の $x, y \in \mathbf{R}_+$ に対して成立する条件は $\beta \leq 1$ です。さらに

$$\det(H(f)(x, y)) = \alpha\beta(1 - \alpha - \beta)x^{2(\alpha-1)}y^{2(\beta-1)} \geq 0$$

が任意の $x, y \in \mathbf{R}_+$ に対して成立する条件は $\alpha + \beta \leq 1$ です。以上で、 f が凹関数である必要十分条件が

$$\alpha \leq 1, \beta \leq 1, \alpha + \beta \leq 1$$

であることが示されました。 $\alpha, \beta > 0$ であるとき $\alpha + \beta \leq 1$ ならば $\alpha, \beta \leq 1$ が従いますから、この条件は

$$\alpha + \beta \leq 1$$

と必要十分です。

VI 2 次対称行列 $A = \begin{pmatrix} a & c \\ c & b \end{pmatrix}$ に対して、以下の条件 (i), (ii), (iii) が必要十分であることを示します。

$$\left(A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \right) \geq 0 \quad \left(\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^2 \right) \quad (\text{i})$$

A の固有値 α, β が $\alpha, \beta \geq 0$ を満たす。 (ii)

$$a, b \geq 0, |A| \geq 0 \quad (\text{iii})$$

(1) A が回転行列を用いて対角化できることを用いて (i) \Leftrightarrow (ii) を示しましょう。

(2) (i) を仮定すると $a, b \geq 0$ が導かれる事を示しましょう。

(3) (ii) が成立すると $|A| \geq 0$ が成立することを示しましょう。

(4)

$$\Phi_A(\lambda) = (\lambda - \alpha)(\lambda - \beta) = \lambda^2 - (a + b)\lambda + |A|$$

から従う

$$\alpha + \beta = a + b, \quad \alpha\beta = |A|$$

を用いて (ii) \Leftrightarrow (iii) を示しましょう。ここで $p, q \in \mathbf{R}$ に対して

$$p, q \geq 0 \Leftrightarrow p + q \geq 0, pq \geq 0$$

であることを用います。

解答 (1) 回転行列 R が存在して

$$R^{-1}AR = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$$

と対角化できますが、これから $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = R \begin{pmatrix} \xi \\ \eta \end{pmatrix}$ と回転座標変換を用いると

$$\left(A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \right) = \alpha\xi^2 + \beta\eta^2$$

となります。

(i)⇒(ii) $R = (\vec{r}_1 \ \vec{r}_2)$ と列ベクトルを定めます. このとき

$$A\vec{r}_1 = \alpha\vec{r}_1, \quad A\vec{r}_2 = \alpha\vec{r}_2$$

となります. これを用いると

$$\begin{aligned} 0 &\leq (A\vec{r}_1, \vec{r}_1) = (\alpha\vec{r}_1, \vec{r}_1) = \alpha(\vec{r}_1, \vec{r}_1) = \alpha \\ 0 &\leq (A\vec{r}_2, \vec{r}_2) = (\beta\vec{r}_2, \vec{r}_2) = \beta(\vec{r}_2, \vec{r}_2) = \beta \end{aligned}$$

から $\alpha, \beta \geq 0$ が分かります.

(ii)⇒(i) $\alpha, \beta \geq 0$ のとき

$$\left(A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \right) = \alpha\xi^2 + \beta\eta^2 \geq 0$$

となります.

(2)

$$0 \leq \left(A \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} \right) = a, \quad 0 \leq \left(A \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} \right) = b$$

(3) $\Phi_A(\lambda) = \lambda^2 - (a+b)\lambda + |A| = 0$ の解と係数の関係から $\alpha + \beta = a + b$, $\alpha\beta = |A|$ が従う. $\alpha, \beta \geq 0$ のとき

$$|A| = \alpha\beta \geq 0$$

が成立する.

(4) (ii)⇒(iii)

$$a + b = \alpha + \beta \geq 0, \quad ab \geq ab - c^2 = |A| = \alpha\beta \geq 0$$

から $a, b \geq 0$ と $|A| \geq 0$ が従います.

(iii)⇒(ii)

$$\alpha + \beta = a + b \geq 0, \quad \alpha\beta = |A| \geq 0$$

から $\alpha, \beta \geq 0$ が従います.

VII $\alpha, \beta > 0$ とします. 第1象限 \mathbf{R}_{++}^2 上の関数

$$u(x, y) := \alpha \log x + \beta \log y$$

が狭義の凹関数であることを示しましょう.

解答

$$u_x = \frac{\alpha}{x}, \quad u_y = \frac{\beta}{y}$$

$$u_{xx} = -\frac{\alpha}{x^2}, \quad u_{xy} = u_{yx} = 0, \quad u_{yy} = -\frac{\beta}{y^2}$$

となります.

$$u_{xx} = -\frac{\alpha}{x^2} < 0$$

$$\det(H(u)(x, y)) = \begin{vmatrix} -\frac{\alpha}{x^2} & 0 \\ 0 & -\frac{\beta}{y^2} \end{vmatrix} = \frac{\alpha\beta}{x^2 y^2} > 0$$

から u が第1象限 \mathbf{R}_{++}^2 上狭義の凹関数であることが分かります.